この約束があったので、山は途中まで登って引返して帰って来たと言う話に、私は深い感銘を受けた。私達の視察したタンカーは日本郵船の時津丸で、長さ三三一m巾五四m二五万七千四百六十トンという巨船で、現在は臼杵湾に錨泊している。この視察によって二人とも貴重な知識を得たことを喜び合った。

氏が亡くなったことは史談会としては全く得難い人を失ったものであり、また広く佐伯市にとっても稀な郷土史家を亡くしたことになり、惜しみても余りある人であった。

最後に謹んで御冥福を祈る　合掌

簾（すだれ）山を越える

清田　義雄
（会員・佐伯市東区）

もう六年前になる。二月末の午后二時過ぎに羽柴先生から電話がかかってきた。

「どうしとるな。ちょいと歩きとうなったがついてこんな」

「おお、いくで、どこいくんな」

「すだれ山を越えてえがなあ。小野市行のバスで直見駅まで来なんせえ」

こんな誘いをうけて直見駅で落ちあった。

「あの丘んところが阿蘇熔岩の河岸台地ぢゃあ」

道路を越えて南側の山に入る。天明七年銘の六地蔵がある。銅鏡をまつるという祠を過ぎて墓地に出る。

請花・返り花の蓮華彫刻が厚味をもってしっかりした彫刻の台座で、あまり見なれない三基の墓が異彩を放っている。間（はざま）という部落だそうだ。

毘沙門庵に出る。今日は老人達がおこもりで集っている。あいさつを交して庚申塔を見る。六臂の持物がはっきり彫られている。法輪。善悪の尺度をはかるはかり綱剣・鉾・剣・剣に二猿がいる。この二猿はおもしろい。二猿で三猿の役割を果たしている。一匹は右手で目を、左手で耳をふさぎ、一匹は口をふさいでいる。

道を下って左手の丘に登る。「愛宕将軍延命地蔵大菩薩」の額をあげた祠がある。村の人にきくと「ぞんじろうさん」と言っているがどうも意味がわからない。享保年間作の石彫像がまつられている。

十号線に下って反対側の丘に登る。下から見える墓地

群を探る。今三股に越える補装道路を建設中であった。下から見た台地の墓地は地蔵の顔がなかなか良い。帰りに見た弥生の地蔵さんよりずっと整ったお顔である。

十号線を再び越えて旧道簾山越しにかかる。道を村人に尋ねても全然わからない。地図で見当をつけてトンネル口の近くから藪をかきわけて登る。中腹に見える横線がどうも目的の道らしい。しゃにむにたどりついた。

百姓一揆の時に国矢・戸倉の家老が一揆の面々との交渉を語り合った。昔越えた峠道に一服して、左手のやや小高い所に登って三股方面の眺望を楽しむ。段々畠、改修中の三股線、冬枯れの赤味を混えた樹や草の遠望はこの時期独特の味がある。淋しさを含んだ落ちつきと言ったものか。なば山の廻りに旧道を見つけた。今は草も枯れて道を探るのには一番よい。

峠を下りて弥生の観音堂に廻る。「大乗妙典一字一石塔」と「三尊炭仏塔」が並んでいる。三尊は釈迦三尊でも「炭仏」とは何か。後でどうやら「嘆仏」（讃仏）の義らしいと教えてくれた。

天満宮から洞明寺へ出て日暮れに帰りついた。数日後の大分合同「灯」欄に羽柴先生の名文「簾山」が出た。

「二三度の春の雨に野道は黒くうるおい、道のほとりには何と呼ぶのか、るり色の小さな花が一面に咲いている。

ひところ寒さに赤くやけていた杉木立は、すでにわづかながら青みを帯びている。下草は枯れて明るく、爪先上りの山道には足にさわるものもない……」

先生は歩くことが真から好きだった。どこを歩いても人見知りの人が多い。気安く話かけては直ぐ土地になじんでしまう。広い視野で何でも探り出す。博学強記、良くあんなに何でも覚えていたものだ。直後に丹念な記録を残していく努力もなかなか真似ることができない程筆まめであった。尺余の『佐伯史談』の積み上げも此の人なればこそ。惜しい先輩を失ったものである。

羽柴先生を偲ぶ

高橋　智
（会員・本匠村三股）

師友という言葉がありますが、私にとって羽柴先生はほんとの師友でした。私は青少年時代家庭の都合で上級学校に行けず、激しい農業労働や日雇稼ぎのかたわら、